

2022年1月8日（土）上演①

千葉県立松戸高等学校

「私のシェイクスピア」

第57回関東高等学校演劇研究大会（東京会場）

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

齋藤 翔海（東京都立片倉高等学校1年）

コロナ禍によって、演劇も含めた様々なイベントを開くことが難しくなっている。松戸高校の舞台からは、「この今現代の中でだからこそ」という強い演劇への情熱を感じとることができた。

戦時中の高等女学生が隠れながらも『夏の夜の夢』、言わずと知れたシェイクスピアの劇の練習をしていた頃の思い出を『夏の夜の夢』に登場する、オベロン達が追想させるという場面から物語は始まる。そのため、物語のほぼ全てが昭和戦中の世界観で進んでいくのだが、その中でも女学生達は今の高校生達のそれと変わらず、自分の心の中に悩み事を持っている。それでも、自分達がいつ死んでもおかしくない状況の中でも、女学生達は演劇をやりたいと思っており、その練習に打ち込む姿に心を打たれた。

また、その中には、ジェンダーに関する悩みを持つ登場人物がいた。当時は今と違い排他的な価値観を持つ地域も多く、その中で他人とは違う自分のことに悩み苦しみながらも向き合う姿は、見る者を惹きつける力があつた。

舞台上の美術や照明はかなり明確に仕上がっており、窓から差す夕焼けや夜空の色が幻想的な雰囲気漂わせていた。この作品の大部分が夢の中の物語であるということも、そのムードに拍車をかける要因の一つだろう。

そして、物語の終盤で女学生達の住む町に空襲が訪れる。これまでも戦闘機が襲来したことによる警報自体は鳴っていたのだが、実際に自分達に攻撃が来ないことを知っていた女学生達はあまり気に留めていなかった。しかし、今回は違った。過去を追想している女学生、主人公の諸星は友人達を森に逃げるように誘導する。だが、戦闘機が攻撃を行ったのは人などいないと思っていた森の中だった。友人達を森に逃げさせたのは他にもない、諸星だった。空襲警報による伏線から襲撃されることになる展開を読んでいたにも関わらず、その際の主人公の台詞に心を揺さぶられたという意見があつた。

演劇の歴史や、人々が演劇をする意味という、講評委員の我々にとっても大切なものを伝えてくれる演劇だった。何気ない稽古ができるような平和な日々が続くように、いつまでも演劇ができますように、という役者達の強い願いが心に伝わってくる作品だった。

千葉県立松戸高校演劇部の皆さん、ステキな舞台をありがとうございました。

